長編新探偵小説　書下ろし

殺人投影図

とうえいず

結城恭介

NON NOVEL

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL－463

長編新探偵小説　殺人投影図

平成 6 年 4 月 1 日　初版第 1 刷発行

著者　結城恭介

発行者　名倉潔

発行所　祥伝社

〒101　東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (3265) 2081 (営業)
☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印刷　錦明印刷
製本　豊文社

万一，落丁・乱丁がありました場合は，おとりかえします。　Printed in Japan
ISBN4-396-20463-9 C0293
© Kyōsuke Yūki, 1994

長編新探偵小説

和城恭介（うききょうすけ）

枚人投影図（つじんとうえいず）

祥伝社

目次

プロローグ　羅血の女　5
Ⅰ　ウェディングドレスを血に染めて　11
Ⅱ　記憶の砂時計　53
Ⅲ　因果の導火線　102
Ⅳ　出口なし　145
Ⅴ　隠された旋律　192
エピローグ　親子の情景　223
解説・新保博久　233

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

装幀・中原達治
本文イラスト・中村銀子

プロローグ　羶血の女

昭和三十五年、横浜。それは、蒸し暑い夜の出来事であった。

男は、丹精に整えられた庭木の間を、身を屈めて歩いていた。

満月に照らされた、強張った表情には、幾筋もの汗がにじんでいる。暑さのためではなく、極度の緊張ゆえに。

手袋が、一本の枝をパキリと折る。瞬間、男は全身を凍らせ、素早くあたりをうかがった。誰も飛び出して来る気配はない。

冷や汗の雫を、玉にして落とし、彼は再び進み始めた。

後方には、堅く閉じられた門が見える。錠前が二重に掛けられ、塀にはガラスが植えられていた。この手の稼業に慣れた者ならば、まず敬遠するような屋敷だ。

いったい、どうやってここまで潜り込んだのか、この、ひどく場馴れしていない男が、コソ泥の常習犯でないことだけは確かである。

繁る葉を掻きわけ、せいぜい慎重に、屋敷の正面をうかがう。人気は感じられない。だが玄関は、見るからに重そうな両開きの扉が、家人をしっかりと守っていた。

さすがにここを狙うほど、男も莫迦ではなかったらしい。無様な足取りで壁際へ走ると、それを伝いつつ、母屋へと回り込む。手で壁を探りながら、木立ちに隠れた窓の下にたどり着くと、手袋で守った指を、そろそろと桟に掛けた。もちろん、開くはず

も――いや、なんということか、それはいとも簡単に、からりと開いてしまった。
男は安堵の表情を浮かべ、ゆっくりと窓を全開し、身を撥ねさせた。その身体が屋敷の中に吸い込まれていく。
そこは、母屋と離れを繋ぐ回廊であった。男は、腕で額の汗を拭うと、迷いもせず、離れに向かって進み始めた。
不慣れではあるが、不案内ではない。この屋敷の構造は、あらかじめ承知の上らしい。
しばらく前進し、突き当たりの角を曲がると、障子が開いたままの和室があった。風の音に混じって、人の寝息がうかがえる。家人は、蒸し暑さに耐えかね、仕切りをせずに、眠ってしまったのだろう。
尻に手をやった男は、ベルトに突き刺してあった匕首を手に取った。鞘を抜く。酷薄な冷たさを湛えた刀身が、妖しく現われる。
広い和室には、布団が二組、並んで敷かれていた。角度が悪く、暗い室内では、寝顔を見ることはできない。枕元には、ハイライトの吸殻がつぶされた灰皿と、水差しが置いてあった。夫婦の閨のようだ。深く寝入ってしまっているのか、侵入者の気配に気づいた様子もない。
ごくりと唾を呑み込むと、まず男は、ひとつの布団の横に屈み込んだ。匕首を構え、寝乱れたタオルケットを剝がそうと、左手を伸ばす――。
そのままの姿勢で数秒。男の額に浮いた汗が、手袋の甲に落ちた。迷っているのだ。
と、タオルケットが動いた。
びくりと五体を震わせ、男の身体が石に変わった。が、気づかれたわけではなかった。相手は寝返りを打っただけだ。薄暗さに慣れた男の目に、まだあどけなさを残した若い女の、穏やかな寝顔が映った。
「……」

男の全身から、急激に力が失せていった。その眉に、ふと、優しげな色が浮かぶ。男は緩慢な動作で立ち上がり、かぶりを振ると、枕元を回り、別の布団の前に置かれてある厨子に屈み込んだ。

匕首を畳に置くと、手袋をはめなおし、そっと両開きの扉を開ける。現われたのは、鈍く光る金庫だ。堅くなった関節を鳴らして指を伸ばし、ダイヤル錠に掛ける。熟練したピアニストのように、それが機械的に巡りだした。

おそらく、この金庫の番号を、身体に覚えさせてあるのだろう。侵入経路からこの金庫破りまで、綿密な計画のもとに行なわれていたのだ。

だが、プログラムはすでに、狂い始めていた。

「きさま、なにをしているっ！」

突如、奥から響いた大声に、男は飛び上がった。声の主は、浴衣を着た恰幅のいい中年だ。はっと横のタオルケットを見、自分の迂闊さに頬をひくつかせる。そこはもぬけの殻だった。

確かめておけば、このようなへまはしなかったものを。主人は小用に立っていたのだ。

「どこから入って来た。なにが目的だっ」

剛毅な性格を剝き出しに、臆することもなく、ずんずんと進んで来る。窮地に追い込まれた男は、とっさに匕首を拾い上げ、尻込みしながらも、それを構えた。

「か、金だ。金さえ出せば、い、命だけは助けてやる」怒鳴りにひるみの唾が混じる。「はやくこっちへ来て、こいつを開けろ。で、でないと、こ、殺す」

「金が目的か？　いいだろう――」

険しい表情ながら、主人は男の言葉に従う素振りを見せた――と、その身体が跳躍した。右の腕が雷光のごとく閃き、男の手首に手刀を叩き込む。

「うっ」

「ヒイッ」

男の呻きと、女の悲鳴が重なった。騒ぎに目を覚

ました若妻の前に、匕首が力なく落ちる。形勢は一瞬にして逆転していた。
「逃すかっ」主人は、踵を返そうとした男の腕を取り、おのが背に乗せて投げ飛ばした。すかさず胸倉を取り、怒鳴る。「さあ、言えっ。誰に金庫の場所を聞いた。番号も知っているのかっ」
「……お、お助けを」
「ふざけるな。まあいい。ゆっくり吐かせてやる。ハル、ハルっ」
襖が、からりと開き、青ざめた女が顔をのぞかせた。「旦那様……」
「なんだ、そこにいたのか。だったらさっさと――!?」家政婦は答えず、そのままくずおれてしまった。男の胸倉から手を離した主人の顔が驚愕に歪む。家政婦の腹は、噴き出す鮮血に染まっていた。「ハル、どうし――ぐうっ」
その目玉が見開かれ、のけ反る。背中に匕首が突き立てられたのだ。信じられないといった表情で、後ろに首を捩じ曲げる。やったのは、例の男ではなかった。
「まったく、しょうがない男だねえ。あとあと面倒だから、先に殺っちまいなって、あれほど言っといたのに。いざとなってビビっちまったのかい？」
乱れた髪に上気した頬。唇の上の黒子が官能的な、女だ。
男は、畳に座り込んでしまっていた。「木綿子――」
「ぼんやりしてるんじゃないよ。さっさと金庫を開けるんだ」
乱暴に匕首を抜くと、主人の傷から血が噴いた。それを浴びても、木綿子と呼ばれた女は顔色ひとつ変えない。狂気の目は、むしろ恍惚としている。
叱咤されて、やっと男は起き上がり、再び金庫に取り掛かった。
「あたしが他の連中を片づけてる間、任せといた仕事ひとつできやしないんだから。そうそう。それで

いいんだよ。おまえさんときたら、指先だけは器用だねえ」

木綿子は、力尽きた主人を突き転がすと、妙に艶かしい声で、男にすり寄った。と、その瞳がくるりと動く。怯えた若妻が、布団を胸に抱いて身をのけ反らした。

「ま、待ってくれ――」殺意を感じ取り、主人がかすれ声をあげる。「妻は……、妻だけは、助けてやってくれ……。お、お腹に、こど、子供がいるんだ。見逃してやってくれ……」

「へえ。赤ん坊がお腹に」べろりと唇を舌で湿らせ、木綿子は蛇のように、すがめた目で若妻をねぶった。「そいつぁ幸せだねえ。幸せだろう？え？」

「ひっ」

「おまえさんは手を休めるんじゃないよっ。開けたんなら、とっとと金を集めてなっ」思わず振り向いた男を怒鳴りつける。若妻は匕首を喉元にあてがわれ、ヒュウヒュウと喘いでいた。「――そう怯えるこたぁないよ。あたしもねえ、じつは産まれたばかりの赤ん坊がいるんだ。子供ってなぁ、可愛いもんだよ。だから、あんたの気持ちは、痛いほどわかるさね」

「あ、う、あ……」

「でも、残念だねえ。このままじゃ、父なし子が産まれちまうよ。あんたも、お腹の子に父親を見せてやれないのはつらいだろう？」

「ひ、ひぃ――」

「子供にとっちゃ、父親は大切だよ。そうだ、なんなら今、父親の死に際を見せてやったらどうかねえ？」

断末魔の絶叫が、屋敷じゅうに響き渡った。

夜明けと前後して、隣家の通報で屋敷に踏み入った警官は、そこで、この世のものとも思えぬ惨状を目の当たりにすることなった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

部屋は文字どおり一面の血の海と化し、それを吸って膨らんだ布団が、ねばつき、鼻をつく異臭を放っていた。よほど無念だったのだろう。息絶えた主人は、血の玉が浮いた目をカッと見開き、爪が剝がれるほど畳に指を掻いていた。だが、なにより陰惨だったのが、若妻の死体である。生殺しの激痛にのたうった痕跡を残し、彼女は、下腹を裂かれた傷口から、まだ拳大の胎児を、乱暴に引き出されていたのだ。

金庫の中に入っていた金、五百万円は、すべて奪い取られていた。

屋敷の使用人も二人いたが、彼らはあてがわれた部屋で、喉をひと突きされ、失血死していた。検剖の結果を待つまでもなく、転がっていた酒瓶の数から、酔いつぶれたところを殺されたことは明らかであった。

また、腹部と脚を刺された上、後頭部を殴打され、庭で失血死しかけていた男がいた。この屋敷に住み込みの料理人である。虫の息で病院に運ばれた家政婦の証言により、彼は他の使用人二人と共に刺されたが即死は免れ、主人を心配してようやく部屋までたどり着き、彼女から賊が逃げたことを聞いて、最後の力を振りしぼって庭へ出たことが判明した。彼自身の血が、使用人部屋から倒れていた庭まで点々と続いていることが、その証言を裏付けた。おそらく、庭に出た時点で犯人に見つかり、逆襲を食らってしまったのだろう。現場には、彼の血痕がついた石が転がっていた。

警察は事情を聴取するため、家政婦と料理人の回復を待つことにしたが、それは不可能になってしまった。治療もかなわず家政婦は二、三の断片的な証言のみを呟いて絶命し、残った料理人は――一命だけはとりとめたが、なんということか、今までの記憶をすべて、失ってしまっていたのである。

I　ウェディングドレスを血に染めて

1

「いまさら、それはないんじゃありません？　取材の話は二週間も前にお伝えしてあったはずです。こうして紹介状も用意してあるし、こっちは筋を通してるんですから、知らなかった、聞かなかったじゃあ、納得できないわ」タイトミニからすらりと伸びた恰好のいい脚を組みかえ、彼女は再びまくしたてた。「今度の取材は、あたしが長い間書き続けてきた題材の総決算になるんです。推理小説ではヒーロー役でも、現実にはみみっちい浮気調査なんかで口を糊している、〝探偵〟という商売を描きながら、それでも実際、あなたのように数々の事件を解決している人がいるんだってことを、ぜひとも世間に知らしめるため――雷門さん、聞いてるんですか？　雷門さん！」

「聞こえていますよ――」あからさまに辟易した顔をつくり、京一郎は窓際から振り向いた。「確かに、あなたが取材を申し込んできたことも承知しているし、紹介状も本物のようだ。しかしね、記者さん」

「あたし、〝記者〟って名前じゃありません」
「失礼――日野さやか君」机の名刺をひっくり返し、彼女の顔と交互に眺め、「だが、はっきりと言っておくが、わたしはOKを出した覚えはない。今日も、君が電話してきた時に、きっぱり断わっておいたはずだ」
「そうでしたっけ？」
「そうだ。それなのに君は、勝手にここに押し掛けて来て、インタビューをさせろだの、小説の探偵をどう思うかだの、しまいには次の事件では同行取材させろだの、自分で非常識だとは思わないのかね？」
「だって、常識的に迫っても、雷門さんがOKしてくれるわけ、ないでしょう？」さやかはさらりと言ってのけた。「あたしだって、あなたのことを少しは調べましたから――雷門京一郎。性別、男。年齢、不詳、ただし三十代前半。生年月日、不明。出生地、謎。職業、探偵」
「たいしたもんだ」
「六年前に〝芳弘ちゃん誘拐事件〟を、警察に先駆けていち早く解決し、以来、〝連続神父殺人事件〟〝手賀沼殺人死体遺棄事件〟など、依頼や警察の協力要請を受け難事件を次々と解決。知る人ぞ知る存在となる。ただし――報酬の額もケタ違い。それでも腕の確かさから頼りにする人間も多く、警察内部にも信奉者を持っているほど。おまけに人命救助の功績で、警視総監賞までもらっている」
「脱帽ですな」呆れたふうにかぶりを振ると、京一郎は狭い部屋を横切り、扉を開けた。「それだけわかっているのなら、これ以上の取材は必要ないでしょう。どうぞお引き取りください」
「もちろんわかってますわ。あなたのひどいマスコミ嫌いも。でなければ今ごろは、浮名の世界でもちょっとは名を馳せていらっしゃったでしょうから。でしたら、教えてください。どうしてそこまで、マスコミをお嫌いになるんです？」

「――みみっちい浮気調査で口を糊している身では、面が世間に知られてはまずいのさ」京一郎は隣りの部屋に呼び掛けた。「中谷くん、お客様がお帰りだ」
「はい、先生」逞しい体つきの割には、まだ童顔の青年が応える。「ちょうど、ご予約のお客様がお見えになったところですが――」
「聞いてのとおりだ。こっちも忙しい身でね」有無を言わせず、さやかを外に押し出す京一郎である。「ご依頼なら、一昨日承りましょう。では」
「あ、あの、雷門さんっ」
「中谷くん、次の方をお通しして」
「あっ、もうっ」
　待っていたらしいうつむき加減の初老の紳士が、中谷青年に案内され、すっと京一郎の部屋に入って行く。と、間髪を入れず扉はばたり。体よく追い出された形のさやかは地団駄だ。
「悔しいーっ。あれ、あの紳士、どこかで……」
「あっはは、やっぱり追い返されちゃいましたね」
「うんもうっ。あなたのミステリアス・ボスの横柄さには呆れるわ。人がここまで頭を下げてお願いして――」
「下げてないじゃないですか」
「……にこにこ笑いながら、キツいこと言ってくれるじゃない」さやかは破れかけたソファに尻を落とすと、サムタイムを取り出して周りを見回した。「にしても、ボロな事務所。今時、手焼き煎餅屋の二階で仕事してる興信所なんて、信じらんない。あなたの大将、がっぽりもうけてるんでしょ？　こんなシケたところにいないで、もっといいところに移ったら？」
　中谷青年は、微笑みながらも素早く、彼女から煙草をもぎ取った。「ここは禁煙。それに、水道橋はいいところですよ。住んでる人の足が、地についてる」
「あ、ごめんなさい――別に、揶揄するつもりは」

「わかってます。でも、先生にしてはいいほうだと思ってください。頭からコーヒーをかけられなかっただけ、幸運だったんですから。やっぱ、あなたの名前のせいかなぁ」
「名前？」
「ああいや、ごほん」と、わざとらしい咳払いでごまかし、「とにかく先生も、もう少し人づき合いを上手くしてほしいんだけど、ねえ」
「へえ。あなた、割と話せるのね。名前、なんてったっけ？」
「中谷賢人です。先生には、ある事件をきっかけに心酔してましてね。こうして大学をサボっては、勝手に助手の真似事なんかをしてるってわけ」
「以後よろしく、ってところかしら」さやかはニヤリと微笑み返した。「あたしも、簡単に諦めるタマじゃありませんから――」
「先生は、〝三響ダイナレック〟という名をお聞きになったことがおありですか？　あるいは、〝三響精密〟を」
「存じていますよ。去年、上場に備えてCIを上場した、電子機器関係の企業でしたかな。本社は神奈川でしたが」
「いえ、もうかなり前に、東京に移りました」
「するとあなたは？」
「ええ。代表取締役をやっております。原田信雄と申します」
いい生地で仕立てたスーツと、ブランド物のネクタイ。そしてきちんと整えられた銀髪。自分の口から言わなくとも、身なりがその初老の男の役職を語っている。ふだんなら、目の前の若造に敬語を使うような立場ではあるまい。とはいえ、傲慢さとはほど遠い、親しみの持てる目をしているが。
「わたしなどは、横文字の名前よりも漢字のほうが、地に足が着いているようで好きなんですが、これも時代の流れというやつですか。代替わりしたこ

ろの、あしたつぶれてもおかしくない時を知っている身からすると、どうも背中がこそばゆいですな。は、はは」

「――お話をお伺いしましょう。原田さん」愛想笑いを返すことなく、京一郎は切り返した。「待っていても茶は出ませんよ。うちには、体育会系のアルバイトしかいないものでね。あなたも、世間話をしに来たのではないはずだ」

「……」

部屋の空気が張り詰めた。原田の目が、値踏みするように京一郎を見返す。やがて彼は、唇を噛んで、漏らした。

「先生は、聞いていたとおりの方のようですな。持って回った話の進め方は、無用のようだ。ご相談にあがったのは、わたしの一人娘のことです。萌子と申します――」

2

「なんてことになってしまったんだ――」

そう呻くと、原田は頭を抱えて、背を屈め込んでしまった。

まるで、周りのことなど眼中にないといった感じである。ざわめきと嬌声が満ちている、ホテルのロビーに、彼は一人、溶け込めずにいた。

水の音は優しく流れ、明るい採光のもと、常緑樹が茂る吹き抜け型大空間だ。さすがに大安だけあって、ドレスアップした女性たちや、無理に盛装した子供、笑い声を交わす若者らが、大勢行き交っていく。その華やかさが、いっそう原田の表情を死人のように見せた。姿だけ見れば、燕尾服に気取ったタイ、磨き上げられた靴と、彼自身、申し分のない風体をしているというのに。握りしめられた白い手袋が、惨めにもくしゃくしゃだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong